文苑

司馬穰苴か事

不老庵主人

司馬穰苴は、田完の後胤なり、齊の景公治世のとき、晉國兵を出して阿甄を伐ら、燕國河上を侵して、齊軍大に敗れしかは、景公心を苦しめたまふ事、一方ならす、此時宰相の晏嬰といふ人、田穰苴を公に薦めていひけるは、こゝに穰苴といふものゝ候、これは田家のすゑにて、身分こそ賤しく候へ、仁以て人を懷け、武を以て敵を挫く勇士にて候、これを試み給ひて然るべしといひけれは、景公御召ありて、軍略を問ひ給ふに、應對流るゝかことくありしかは、御感斜ならず、やかて將軍に任し給ふ、穰苴兵をゐて、打向ふ、時に穰苴申しけるは、拙者數ならぬ身をもて、君の殊遇に預り、閭伍の中より擧られて、大夫の上に座すること、れふけなくも冥加の至にこそ候へとも、士卒いまた懷き申さず、百姓もいまだ信し申さず候は、偏に微賤の身にて權威のなき故に候へは、願くは君の寵臣にて國中にて尊まるゝ人一人御選遊はれ候ひて、監軍となし賜はれ候はゝ、畢竟御方の御爲ともなり申すへしと覺え候と申しけれは、景公げにもと御意ありて、莊賈といふものを遣さる、穰苴退出の後莊賈にあひて、明日の午刻までに、時を違へず、本陣まて着到せられ候へと約しけり、明くれは、穰苴馬を馳せて、先陣に着き、日表を立て漏計を懸け、莊賈の來るをまちけるに、賈君の覺めてたき

より、心驕りてけれは、大將既に陣に行けり、殊にわれは監軍なれば、急くにも及ばじとて、親戚の者ども、送別の盃くみかはして留りけるほどに、はや日も午の刻になりしかと、莊賈來らず、穰苴今はこれまでなりとて表を外し、水を決し、走りて陣に入り、兵を廻りて隊を調へ、約束をいひわたしけるに、猶未來らず、夕刻に至りて、やう〳〵莊賈の來りしかば穰苴、ヤ、貴殿は何とてかくは期を違へられ候ぞやと問ひなじりしかば、賈、色代していひけるは、拙者、上は大夫より、下は親戚に至るまて、今日拙者を見送らんとて來り候によりて、圖らす留り候ひぬといふ、穰苴聞もあへす、息まきていはく、怪しかることをきくものかな、その罪赦すへからず、元來大將たるもの、君命をうくるときは、其家を忘れ、軍に臨みて約束するときは、親戚をわすれ、金鼓の中には一身を忘るといはずや、貴殿は、今の時を、何と心ゐられ候ぞ、敵國深く入りて、國內騷動し、侍も大將も、境外に身をさらし、かしこくも、我君には、夜はいもねたまはず、晝は食もゐきこしめさす、百姓の命は、ひとへに貴殿の一身にかゝり候はすや、さかるに親戚に送られ候とは、抑何事ぞや、この罪赦すへからすといひて、軍正をよび出し、期に後れて來るものは、軍法には何とあるぞと問ひけれは、軍正、そは斬罪に處すへきものに候といひしこのは、莊賈聞て、始めて恐を抱き、急使を馳せて、景公の赦を請ふ、其使未た還らぬうちに、莊賈を斬罪に處せしかは、三軍皆身ふるひして恐れすといふことなし、さて時をへて、景公の使、馳せ來りて陣中に入り、賈を赦せとの命を傳ふ、穰苴之を見て、大將陣中にあるときは、君の令といふとも、受けざることあり、と言畢

つてさて又軍正に問ひけるは、陣中に馬を馳せぬが定なるへきに、今使者の馬を馳せたる、その罰いかに處すべき、軍正答ふ、これも斬罪に行ふへき定にこそ候へといふ、使者大に恐れて、とかくの言もなくゐけるに、暫ありて穰苴いはく、君の使を殺さんこと然るべからずとて、その僕車の驂乘を斬り殺し、三軍に狥へてさていはく、汝行きて事の由を申せとて、使を追還しけり、さて後、穰苴その宿營、井竈飲食のことまて一々見めくりて、病者を慰め、醫藥を與へ、みつからしてそのものをなてさすりなとして、ひたすら士卒をいたはる、その糧食は、悉く士卒に與へて、これをもてなし、常の糧食は、士卒と平分して、その身の取る所はその兵の最も弱きものにひとしくするなと心を盡さざる所なし、三日はかりかくして後兵を調へしに、病めるものさへ行あんことを求めて、一軍悉く奮ひ立ちて、互に後れじとぞ爭そひける、此事遠近に聞えければ、晉の勢は、風をきゝて兵を引かへし、燕の勢も水を渡りて退き去る、よりて追擊して先にとられし領地は、悉くとりかへしてぞ歸りける、未た國都にいたらさるうちに、隊をはなち、約をとき、兵ともと誓を立てゝ後、邑にぞ入りにける、景公諸太夫と共に郊外に出迎はれ、軍を勞らひ、禮をなし、始めて宮殿に入らせ玉ひ、穰苴に對面ありて、即日大司馬の官に任し給ひしかは、これより田家益齊國に尊まれけるとそ

原文の妙處は莊賈を斬りし一段にあり此文も尤こゝに力を用ひしとみえて字々紙上にたち千載の下その聲色をみきくかことし通篇譯文の痕みえさる

いとよし

日本魂　稼堂

師木嶋の大和心ははるの花秋の霜にそあるへかりける

野寺藤花

撞きいつる野寺の鐘にゆらくかな風なき庭の藤波の花

硯友會の席にて

窓あけて打なかむれは淺緑ねこそいはれね卯の花の頃

阿彌陀寺にて躑躅花を

綾にしき錦にあやの岩つゝしはなのうてなや御佛の國

高田氏の芍藥を見にゆきて

いよす垣内外に匂ふ芍藥のはなに心のへたてなのよさ

客居夏日

青柳の長き日あかす文ミれは旅の浮寢の言のはもなし

粟屋君のミまかりたるをいたミて　不老庵主人

ことしのミ墨染にさけ白雲の立田のはなよ心ありせは

世の風雲（硯友會席題）

稼堂植批